



上高地集中

今年も群馬支部恒例の上高地集中が開催され、7月26日（土）、日本山岳会上高地山岳研究所（山研）に、西田さん、中山さん、根井さん、田村さん、小池さん、中村さん、木暮幸弘さん、和子さんご夫妻、川端さん、白石さん、星野さん、田中の12人が集まつた。

今回は、主に4コースが設定された。中房温泉登山口から合戦尾根を登り大天井岳、大天莊泊、東大天井岳、横通岳、常念岳、蝶槍、蝶ヶ岳、蝶ヶ岳ヒュッテ泊、長嶋山を通って2泊3日で山研へ向かう北アルプスパノラマ銀座コースに加え、徳沢登山口、横尾登山口、三股登山口、それぞれから蝶ヶ岳を目指す3コースである。蝶ヶ岳ヒュッテでは、各コースから集合した9人が合流。蝶ヶ岳からの絶景を満喫しながら、ここまで無事を讃え合つた。蝶ヶ岳ヒュッテに宿泊した9人は、26日7時に上高地に向



山研前で記念撮影



槍穂高を眺めながらの快適な縦走

けて出発。高山植物を観察しながら、のんびり歩んだ。小梨平まで来て雨に降られたものの、山研には、15時に到着。参加者12人全員が集合できた。日が暮れてからの懇親会では、今回の各コースの様子や個人山行の報告、今後の支部の方向性など、久しぶりに顔を合わせた会員同士、山談議に花が咲いた。

今回も天気に恵まれ、北アルプスの大自然を満喫する充実した合宿となった。今後も上高地合宿を通して、支部会員同士の交流の輪を広げ、深めて、活気のある群馬支部にしていきたいと考えている。

(田中 規王)



燕岳～蝶ヶ岳縦走

今年の上高地集中合宿は、7月24日から27日で、中房温泉から蝶ヶ岳を縦走して上高地へ下山するコースに参加した。初日は朝から好天。合戦尾根を登り、大天莊を目指した。急登で知られるこの尾根は体力を消耗すると身構えたが、途中の合戦小屋で名物のスイカを味わいながら楽しく歩を進め、燕山荘に到着できた。行程の都合上、燕岳の登頂は断念したが、可憐なコマクサの群落や優美な燕岳の姿を写真に収めつつ大天莊へ向かった。途中雨に降られたものの、着く頃には空も回復し、大天井岳に登頂することができた。残念ながら頂上からの展望は得ら



合戦小屋にて
名物のスイ
カを味わう

れなかったが、大天荘からは歩いてきた燕岳方面の稜線が夕陽に照らされる美しい光景を見ることができ、大きな充実感を味わった。さらに、大天荘での食事は夕食・朝食いずれも手が込んでいて、とても美味しく大満足。疲れた体を癒やし、力を養うことができた。

2日目は朝から快晴。赤く染まるモルゲンロートの穂高連峰を眺めながらの出発とな



蝶ヶ岳ヒュッテで合流し
たメンバーと共に

った。横通岳、常念岳を順に踏破し、はるか彼方に見える蝶ヶ岳を目指す。なかなか近づかない山容に不安を覚えながらも、蝶槍を経て無事に蝶ヶ岳ヒュッテに到着。ここでは別ルートから登ってきた群馬支部のメンバーと再会し、賑やかで楽しい夜を過ごすことができた。深夜にそっと外へ出てテラスから仰いだ満天の星空は、言葉を失うほどの迫力で、今も忘れられない。

3日目は名残惜しくも下山。槍・穂高連峰の雄大な姿を背にしつつ、足元に咲く小さな高山植物を愛でながらゆったりと歩いた。上高地の山岳研究所では更に他コースを歩いてきた群馬支部のメンバーとも合流し、下山の安心感も相まって一層気持ちが和み、心地よい時間を過ごすことができた。初めての長距離縦走に不安もあったが、先輩方の手厚いサポートのおかげで無事に踏破できたことに感謝している。

3日目の夜から4日目は山岳研究所にて懇親会。合宿の締めくくりとして経験豊富な先輩方の体験談を伺うことができ、登山技術や安全管理に対する意識を新たにする貴重な学びの時間となった。今回の合宿は、雄大な山岳景観を堪能するだけでなく、仲間との交流や多くの学びに満ちた充実の山行であった。今後の登山活動へつながる大きな糧となったと実感している。

(白石 直子)

蝶ヶ岳 絶景に疲れ吹っ飛ぶ

7月25日、蝶ヶ岳に登った。山岳会に入って北アルプスは唐松岳、涸沢ヒュッテに次いで3度目だが、本当にきつかった、というのが本音。

午前6時40分、三股登山口からスタート。今回は夫と2人、頼れるリーダーはおらず心細い山行である。標高差1300m、はたして登り切れるのか。

本沢にかかる吊り橋を渡り、樹林帯の中を進んでいく。木漏れ日が気持ちいい。が、連日の猛暑、少し歩いただけで汗が噴き出す。水分補給、安全第一。

1km行くと、有名な「ゴジラの木」があるはず、だったが予想外の急な階段の連続。ついに私の前にゴジラは現れなかった。いつの間にか通り過ぎてしまつたらしい。

進むにつれ木々の切れ間から山々が。それらは遙か高いところにある。歩くこと3時間ちょっと、中間地点のまめうち平に出る。苔むした木々に包まれた、唯一の平坦地。三股から2.5kmの地点。



ここを過ぎたあたりから登りが徐々にきつくなる。程なく急な階段が。いよいよか。到着予定までの2時間はこの繰り返し。見上げるとその先が見えない10段ほどの階段。見上げるとまた階段、ウンザリである。足は上がるが、相当太ももにきている。遠くからは不安をあおるよう雷鳴。広いところでレインウェア装着。階段の上りは続く。雷雨が少し小ぶりになった頃ヒュッテの案内板が目の前に。雨に濡れたキヌガサソウが私たちを迎えてくれた。ちなみにヒュッテの手ぬぐいに使われていたのはこの花の絵柄。

翌朝、前日に合流した山行委員長の田中さんほか6人と蝶ヶ岳ピーク(2677m)で記念撮影。夏の青い空、槍ヶ岳、穂高連峰のすばらしい景色は一生涯の思い出、苦労して登ってきた甲斐がある。

妖精の池、お花畑を堪能し、あせらずに下山。山研で根井支部長の姿を確認したときはホッと脱力。田中さんほか6人には大変お世話になりました。ありがとうございました。
(木暮 和子)

高頭祭から上高地へ

「上高地集中」へは日程の関係で今年も第2代会長を顕彰する弥彦山での「高頭祭」から向かうことになった。昨年はJRを乗り継ぎ松本電鉄（今はアルピコ交通と呼ぶらしいが）経由で入ったが、今年はマイカーでの移動となった。

7月25日、お昼前に八木原会員とともに弥彦駅前の旅館で越後支部と合流。浦野会員とお姉様も加わる。午後一番で弥彦山上の高頭祭会場へ向かう。今年で68回目となる高頭祭。昨年は国際山岳平和祭がかぶさって、国際色豊かな祭典となつたが、今年も地元山岳関係者を中心に弥彦山は大にぎわいだ。



弥彦山大平園地で開かれた
第68回高頭祭

セレモニー後はたいまつをかざして弥彦山から弥彦の街へと歩く「たいまつ登山」と続く。群馬支部

弥彦の街へと向かう
たいまつを手に
神社から



4人は車で下って、弥彦神社上からの参加。暗くなった境内で神火を奉納し、弥彦の街へ繰り出す。轟音に見上げれば弥彦の花火。沿道からは多くの見物客が声援を送ってくれる。たいまつの重さで

全身に疲れを感じるころ、弥彦駅前にゴール。駅前旅館では越後支部の歓待と越後の酒でたっぷりお清めをし、燕三条駅前のビジネスホテルに泊まる。

翌朝、前橋へ帰る八木原さんを見送り、上高地へ。北陸道から上信越道、長野道とつなぎ、松本からは通いなれた梓川沿いの道。2年続けて、第2代会長と日本山岳会創立に導いたワインパーの故地をたどることになったのにも、何か大きな意味を感じる。11月3日には3代会長で群馬県太田市出身の木暮理太郎を偲ぶ会が開かれる。おもに財政面で会草創期を支えた（それだけではないが）高頭仁兵衛の功績も大きいが、高頭からバトンを受け継ぎ、戦前戦中の厳しい時期のかじ取りをした理太郎の存在も大きい。

(根井 康雄)

山行報告

石尊山・ヤシオ山

令和7年4月26日土曜日、午前9時、足利小俣町の叶花集会所に集合し総勢7人の参加で登山をしてまいりました。午前中にヤシオ山に登り、道なき道をリボン頼りに登りました。天候は晴天でしたが気温はまだ肌寒く、歩いているうちに温まってきました。

若い草花も芽吹いて春の季節を感じながらの登山となりました。標高324mでしたので、山頂で休憩しても、往復2時間で下山し、昼食休憩をとつてから石尊山に登りました。

直近のニュースでは、石尊山で滑落事故があり不安を持ちながら行ってきましたが、江戸時代の女人禁制の登り口に大きな2m以上の石があり、歴史を感じさせられながら最初の林道を登っていました。しばらくすると尾根に出て眼下の景色がよく見えました。

きれいな山々や遠くの空を見ながら頂上(486m)につきました。武藤リーダーの的確な指示により下山も安全にできて、途中、加藤安全研修委員長によるロープを使用した下山にも挑戦し安全第一で下ることができましたことに感謝を申し上げます。尾根は狭いですが、岩場を登らなければ安全な山でしたのでトレーニングには最適でした。（大谷 祐三）

立山三山縦走

7月10・11日の予定で浦野さんと星野さんに企画してもらった立山三山縦走。室堂平から反時計回りで浄土山、立山（雄山）、真砂岳、別山、剱御前小舎を抜け雷鳥沢を下りミクリガ池、室堂平へ戻るコース約12.4km、標高差は1420m。

天気は絶好の山行日和。7時30分、扇沢駅から立山黒部アルペンルートで電気バス、ケーブルカー、ロープウェイ、電気バスを乗り継ぎ室堂平へ。室堂平から見上げた青空に映える立山連峰の山並みが素晴らしいテンションが上がる。室堂平で高度順応し最初のピーク浄土山へ向かうが、雪渓と急登のダブルで息が上がる。

宿泊した一ノ越山荘からの幻想的な美しい夕やけに癒やされ翌朝6時半出発。容赦ない岩つづきを浮き石や落石に注意しながら慎重に登り、雄山山頂で

は安全登山の祈祷と万歳三唱、ご褒美の大パノラマに心奪われる。

雄山から大汝山に続き、富士の折立から眼下に見える室堂平や雷鳥沢の緑とコラボしたゼブラ雪渓も楽しめた。360度のパノラマに映るアルプスの山々をアピリと照らし合わせながら山名と位置確認をした。

最後のピーク別山からは、誰もが憧れの鋭く切り立った剣岳が目の前に。あまりの雄大な景観に見とれしばらく立ちつくす。雷鳥沢の雪渓を下り、最後にきつい登り返し後のミクリガ池温泉で食べたソフトクリームが疲れた身体にしみて最高においしかった。来年は憧れの剣岳に行ってみたい。（川端 恵子）

花の名峰 早池峰山(1917m)

6月21・22日（土・日）に花の名峰として知られる岩手県の早池峰山山行が、川端さん、中村さん、白石さん、田中、そして東北の山を巡っていた佐藤光由さん、緑さんご夫妻が現地で合流し、6人で実施された。片道500km以上の遠征となつたが、移動中の車内も楽しい雰囲気で飽きることなく、楽しく過ごせた。15時過ぎ、佐藤夫妻と宿泊地である大和坊で合流。後から到着した4人は、明日の登山成功祈願に早池峰神社に参拝。夜は、山の幸づくしの料理と地酒で英気を養った（佐藤夫妻は、初日に登頂済み）。

翌朝一番のシャトルバスに乗り込み登山口のある小田越へ向かった。登山口の天気は雲の多い晴れで、生暖かい風が吹いていた。ゴミ一つない綺麗な登山道を6:00に歩き出した。森林限界を過ぎると、まるで作り物のような茶色のごつごつとした山容が現れた。そして、風は強さを増してきた。それでも、お目当ての高山植物が辺り一面に広がり、キラキラとした姿を現すと、立ち止まりながらシャッターを切った。その後も強風は収まることなく、5合目に到着。岩陰で装備を整えて歩き出したものの、安全に進むことが出来ないと判断し、1730m付近で撤退を決断した。

雨は降らず気温も低くなく、ただただ爆風による撤退であったが、賢明な判断だったと考える。これはこれで貴重な経験となった。引き返し2合目まで下りると、風は強いものの、爽やかにさえ感じられ、のんびり昼食をとった。



早池峰山を望む



早池峰山登頂は叶わず、またの機会に持ち越しとなつたが、心に残る充実した2日間となった。

（田中 規王）

東北・北海道地区交流集会に参加して

北海道支部創立60周年記念兼東北・北海道地区交流集会が7月11、12日の両日、洞爺湖温泉と背後の有珠山エリア（洞爺湖有珠山ジオパーク）で開かれた。

東北6支部のほか8支部が参加。本部と主催の北海道支部を含めると全国34支部のうちおよそ半数の支部から約100人が夏の北海道に集つた。群馬支部からは根井支部長をはじめ、小池事務局長、中山ご夫妻、木暮和子と私の6人が参加した。

今回の目玉は、2日目の交流登山。コースは①有珠山火口原②昭和新山③西山山麓④自由行動一の4コースで、このうち、木暮家は①の有珠山火口原を選んだ。①から③は火山マイスターが同行しないと立ち入ることができないエリアという特別なガイドツアーで、当然ヘルメットは必須。木暮家は今後使うかどうかわからぬヘルメットをこの日のために事前に購入して準備を整えた。

ちなみに有珠山は2000年、洞爺湖温泉街のすぐ裏手で23年ぶりに噴火し、温泉街の住民は4カ月に及んだ避難生活を経て徐々に復興を果たし、3年間のコロナ禍のダメージも乗り越えて、現在はインバウンド客で活況を呈している。そんな有珠山を選んだ理由は、50年ぶりに立ち入り禁止の“封印”を解いて火口原に入れるという特別感に心が揺り動かされたから。20世紀以降4回噴火してきた有珠山エリアの特殊な山岳環境、火山が生み出した景観を実際に自分の目で見て肌で感じができるチャンスを逃すまいの一心得った。

午前8時、用意してくれたバスに乗って有珠山ロープウェイ駅へ。眼前に迫っている昭和新山を眺めながらロープウェイに乗ることおよそ6分、あつという間に山頂駅に着いた。ここから展望台経由で火口原に向けてスタートだ。

展望台からは大有珠をはじめ、昭和新山、洞爺湖、噴火湾などがくっきりと見渡せ、そのスケールの大きさに息を飲んだ。

景色をカメラに収めるのもそこそこに、火口原に降りるために木製の階段をひたすら下ることおよそ15分。立ち入り禁止の看板が右手にある。ここがこれから向かう火口原の入り口だ。

普段、人が入らない場所は、踏み跡こそあるもの

の、ススキや実生のダケカンバ、カラマツなどが生い茂る草原。藪漕ぎをしながら急ぎ足で歩かないと前人の背中を見失ってしまいそうなくらいのペースに、正直戸惑いを感じつつ、遅れまいと必死に前人の背中を追った。踏み跡があるのは、調査や下見のために研究者や火山マイスターが入ったためにできた道と、あとで聞いて納得。

銀沼大火口の縁をめぐり、最終目的地Ⅰ（アイ）火口についたのは午前11時。ここで再び火山マイスターの酒井史明さんが有珠山における防災の歴史をレクチャー。31人参加者全員で防災・減災意識のあり方などを共有した。

帰りは火山マイスターの児島秀明さんが再び藪漕ぎしながら立ち入り禁止の看板のところまで案内してくれて現地研修は終了。その後は遊歩道と林道を使って下山したが、火山マイスターと別れてからもペースは相変わらず速く、のちにヤマップで確認したら平均ペースは130～150%だった。おかげさまで余裕で洞爺駅に着くことができた。ホテルから駅まで車で送ってくれた北海道支部の方や今回の企画を立案・実行してくれた北海道支部の方々にこの場を借りて感謝申し上げたい。

なお、翌13日には根井支部長と北海道駒ヶ岳に登った。東北・北海道地区交流集会だけで帰るのはもったいないと、北海道新幹線・新函館北斗駅の1つ手前（特急で）にある大沼公園駅が最寄りの同岳に登る企画を根井支部長が提案。これに賛同して実現した。

行程は駅前からタクシーで6合目登山口まで移動。入山可能時間の午前9時に登山を開始した。この山も火山で1998年に噴火して、現在は標高およそ900mの馬の背が山頂ということになっている。

馬の背
北海道駒ヶ岳



スタート直後
こそ木漏れ日の
中を歩く快適な
登山道だった
が、10分も歩く
と生えている樹

木も小さくて、木陰はほとんどない。なおかつ南面の登山道はクルマが通れるほどの広さのため、直射日光を遮ることができない。

登山を開始して1時間半後、そんな暑さや疲れなど吹き飛ぶような絶景が待っていた。鋭くそびえる

剣ヶ峰。規制ロープの先は火口原だ。眼下には大沼国定公園が広がっている。シャッターを何度も押した。

独特的の山容を持つ駒ヶ岳は、山頂部から4kmの区域内への入山規制が行われていて、今年も6月1日から10月31日までの期間のみ規制が緩和され登山が可能になる。入山時間も決められていて午前9時から午後3時までに登山口に戻らなければならぬ。

下山したのは12時過ぎ。およそ3時間の山行だった。行きのタクシーに迎えに来てもらい、前泊した大沼公園駅前のホテル、旭屋に戻ってランチをいただいた。下山祝いと称して根井支部長はビールや日本酒をおいしそうに飲んでいる。店内に流れるジャズの音色が心地よい。結局、特急北斗に乗る15時過ぎまで旭屋に長居してしまった。（木暮 幸弘）

魔女の瞳を見たくて

4月の支部山行が19日に予定されましたが、磐梯吾妻スカイラインが開通せず、中止になりました。しかし、諦めきれず有志山行として開通後の4月29日に計画したものの、降雪による通行止めで延期としました。5月になっても週末の天気が思わしくなく、山行計画も予定通りとはいきませんでした。そして三度目の正直の6月7日、快晴微風絶好のコンディション！残雪を踏みしめてながらかな一切経山を乗越し、ようやく青く澄んだ「魔女の瞳」を見下ろす



五色沼魔女の瞳

ことが出来ました。周囲を見渡せば、西にどっしりと磐梯山が聳え、南には智恵子が「本当の空がある」と言った安達太良山がお椀を逆さにしたような姿を見せっていました。鎌沼周辺のミネザクラも薄ピンクの綺麗な花びらを広げていました。

お昼を行動食で軽く済ませ、スカイライン経由で帰宅の途に就きましたが、さらにここでイワカガミの大群が、灰色の山肌をそれはそれは見事に濃いピンクに染めていました。



ミネザクラ

前橋から東北道利用で往復7時間要しましたが、それに見合う価値のある山行でした。季節を選び、お天気と風の様子を判断のうえ行かれることをお勧めします。（田村 和彦）

初めての沢泊！名渓ナルミズ沢へ

2025年の暑い夏。「こんな時は沢だ」と、1泊2日の沢旅へ出発した。

“天国のツメ”や“デート沢”と形容される、奥利根を代表する名渓・ナルミズ沢。「どんな世界が待ち受けているのだろう」と胸躍らせながら出発した。

宝川温泉奥の林道を進み、「長いな…」と歩くこと約2時間半。渡渉点まで辿り着いた私達を待っていたのは、透明度抜群の水と穏やかな渓相だった。その後も続く、エメラルドグリーンに輝く淵や美しいナメの数々！この日は私達でこの景色を独占し、幾度も歎声をあげながら名渓を楽しんだ。

夕方になり、ツェルト2張で本日の宿が完成。沢の水でお酒を冷やしている間に、焚き火の準備！大自然に包まれながら火を囲み、仲間と語らう時間は、なんとも贅沢なひと時だと実感したのだった。ただ、沢泊が初めての私にとって衝撃だったのは夜。この宿は“お客様”が多く、お腹にカエルが乗っていたり、顔中をアブに刺されて“お煎餅”顔になったり…と、賑やかな沢泊デビューとなつた。

2日目も美しい淵や滝をいくつも通過し、“天国のツメ”に向かい歩みを進めた。源頭部へ来ても藪漕ぎはまったく必要なく、気づけば美しい草原が広がっていた。「天国はこういう場所に違いない…見たことないけど！」と思えるほど美しい景色に感動した…のも束の間、やはりそんなに人生甘くはない。稜線に出てからジャンクションピークまでの藪漕ぎに加え、朝日岳から宝川温泉までの長い長い、5時間超の下山…心底くたびれたが、不思議なことに、思い出すのは楽しかった記憶ばかり！良き仲間と歩けたこの2日間は、一生心に刻まれる大切な思い出となつた。



天国のようなナルミズ沢源頭へ



穏やかな淵を行く



美しいナメ

（中島あづさ）

NEWS

[速報・短信]

第1回みんなのあかぎ林間学校

群馬支部は埼玉支部の協力も得て、8月17日・18日、国立赤城青少年交流の家をベースに、第1回「みんなの赤城林間学校」を開催した。

群馬支部ではここ数年にわたり、荒木元副支部長ら有志数人が国立赤城青少年交流の家の学校登山支援にあたってきたが、この有志メンバーを核に、山岳会独自に林間学校をやってみようということで、埼玉支部とも赤城を舞台に協力して子ども登山を！という話に発展し、昨年末から両支部でZoomミーティングを重ね開催に向けた準備を進めてきた。

安藤財団の支援のほか、群馬県教委、前橋市教委、上毛新聞社、朝日新聞前橋総局などの後援も得て、5月から広報をスタートさせた。参加希望者は東京都からの2人も含めた11人（内保護者2人）。20人くらいを想定していたが、第1回、結果的にはちょうど良い人数だった。

7月6日に長七郎山で事前登山を行い、参加者のレベルや意識の確認と、参加者同士、参加者とスタッフのアイスブレイクを図った。そして迎えた8月の本番。群馬、埼玉だけでなく東京支部からも応援をいただき、1日目の施設内プログラム、そして2日目の鍋割山登山と、自画自賛もあるが充実した林間学校になったと思う。山岳会が作る林間学校。原型は出来上がった。参加者や保護者の評価も思いのほか高かった。反省材料も多かったが、得たものも大きい。来年に向け、充実とブラッシュアップを図っていきたい。

（根井 康雄）



最高点で記念撮影

映画「てっ�んの向こうにあなたがいる」

本年10月31日（金）から田部井淳子さんファミリーを描いた映画「てっ�んの向こうにあなたがいる」が公開されます。50年前の1975（昭和50）年5月、「世界最高峰エベレストに女性として世界初の登頂

成功」として世界中に田部井淳子の名を知らしめたあの田部井さんです。10月20日で亡くなつて9年になります。「登山」は大きな主題ですが「登山の映画」ではありません。

田部井さんの人生を変えたこの快挙は、国連が制定した「国際婦人年」と重なったことでさらに評価や話題の輪を大きくしました。世界的ヒロイン「ジュンコ・タベイ」の名前は男女平等や女性の社会進出などの時代背景の象徴の一つとして、世界中を独り歩きました。

ご本人も最初はさぞや戸惑つただろうし、当時の田部井さんには重荷でもあったと思うが、大きな飛躍、活動を広げるチャンス、ステップになったのではないかでしょうか。登山界も男社会でした。そんな中で掴んだ栄誉「世界初」の自身の立場の大変さも認識せざるを得なくなつたのです。

ご主人政伸さんは群馬県前橋市出身のホンダ山岳部の精鋭クライマーでした。内助の功を果たします。田部井夫妻のなれそめも谷川岳の一ノ倉沢でした。有名人の子として生まれてしまったがゆえの息子の苦悩も反抗も描かれています。その息子も長ずるに及び家族のきずなを取り戻し、母亡きあとも東日本大震災で被災した高校生の富士登山も続けてい



ます。

俳優陣は豪華です。田部井さん役は吉永小百合。今回が124作目の出演だそうです。青年期は「のん」。政伸さん役は佐藤浩市。読売記者だった北村節子さんは天海祐希。阪本順治監督は「こんな殺伐とした世の中だが、老若男女元気になれる映画になったと自負している」と語る。

吉永さんは大決心をしてピアスを開けたそうです。吉永さんも役にならい生まれて初めてピアスを開けると、解放されたような気持ちにはなったが、ピアスを開けると1カ月間泳いではいけないとお医者さんに言われたのは辛かった、とのエピソードも。撮影は全て日本国内で済ませました。

谷川岳山岳資料館所蔵の登攀具、装備類もたくさんお貸しし、昨年11月の雪の立山での撮影にも同行し、多少のアドバイスもさせていただきました。

立山では10年前の映画「神々の山嶺」の撮影でもネパールで一緒にいたカンチャ・シェルパさん、今は日本で結婚し働いていますが、「シェルパ役」で出演していて旧交を温めました。教師の奥さんは昨年の12月に冬休みを利用してカトマンズに来られ、そこでもエベレスト・トレッキングから帰った私を訪ねてくれました。山好きでなくとも楽しめます。ぜひともご覧ください。(公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会顧問 八木原園明)

想い出の山

剣岳

吉田 文江

私が桐生山岳会に入って2年目の23歳の冬から、冬、春、夏の剣岳通いが始まった。山岳会が冬の剣岳に色々なルートからトレースをつける事を集中してやっていた時期が私の20代から30代だった。冬季は早月尾根から始まり、1980年からは5年間かけて、大日岳から剣岳に行く事ができた。その次は、源次郎尾根から剣。その次はハツ峰Ⅰ峰からの剣へと山岳会がトレースしていないルートを登り続けていたお陰で参加できた。この会の良い所は、女性男性を問わず行きたいと思えば、参加できること。また前会長の故樋口宗平氏や女性同士での佐藤緑さん、壁美和子さんや平井智則さん、吉田秀樹との出会いが剣への思いの原動力になっている。ハツ峰Ⅶ峰のサラサラ雪の中の雪で窒息しそうな登攀、源次郎尾根中腹での緊急の雪洞でのビバーク、剣御前小屋前でのホワイトアウトの中のワンデリング、雄山東尾根での突風の中でテントの生地が静電

気の火花を散らせるのを見ながらテントの四隅に体を置いて、明るくなるまで待った体験、早月尾根の小屋の前で突風に荷物を背負っていても足をすくわれる

体験、天気の良い時に見せる素晴らしい景色、富山湾からのイカ釣り船や夜景、日の出、日の入り、月の明るさや自然からの恵みが時と場合によって見せてくれる。

剣の自然から学んだ事と山岳会の素晴らしい仲間にその都度出会えた事が70歳になるまで山を継続できたりとなりました。この年になっても剣に行きたいなと言うと付き合ってくれる仲間がいて、最近では、春の早月尾根や夏の早月尾根に行ってきました。ありがたい事です。



結婚以来一緒に登り続けている主人秀樹と残雪の剣岳山頂にて

支部長のつぶやき②**シニア遭難とフラット登山**

あいかわらず山岳遭難事故が右肩上がりで増加傾向だ。しかもシニア登山者の事故が多い。全登山者中に占めるシニアの割合は高く、しかもキャリアの浅い登山者が多いのだから当然という見方もある。確かにそういう論理も成り立つだろうが、50代、60代、70代と歳を重ねたシニア登山者なら、同時に人生経験も生かして、謙虚に自分を知り、山を知るべきだろう。体力の低下、バランス・筋力の弱まりは自覚できるだろうが、骨密度は自覚症状がないのでしっかり調べておきたい。リスクを予見し、自分にふさわしい山やコースを選び、慎重に登ってほしいのだ。

バリエーションルートで不可抗力的なアクシデントが発生したというなら百歩譲っても、一般コースで「行けるところまで行こう」と言って、途中で動けなくなりヘリコプターを呼ぶなど、山屋世代の「若いころ」

には考えられないことだった。「インターネット登山」や「名山ハンティング」の安易で異常な広がりにも問題の一端があるように思える。

一方で「フラット登山」が静かなブームという。頂を目指さない登山、ロングコースに挑まないトレッキングで、無理なく山と自然を楽しむというものだ。群馬支部も平均年齢は60代半ば。(自覚症状はなくても)持病を抱える年齢でもある、膝や股関節の変形も進んでいるだろう(私自身も常備薬が欠かせず、人工股関節置換術も受けた)。そして筋力もバランスも低下していく。体力や運動能力が人並み以上という自信だけで、実は無謀なチャレンジをしていないだろうか、自問して欲しい。個人差はあるだろうが、加齢による遭難リスクの上昇は素直に受け止めなければならない。

そしてこのフラット登山というムードを学び、少しづつでも実践し始めて欲しい。それこそがまさに何歳になっても続けられる「健康登山」ではないだろうかと思う。

(根井 康雄)

事務局だより**【主な活動・事業・イベント】……………
〈2025年〉**

- 国スポ・スポーツクライミング関東ブロック大会（6/28・29 前橋市・群馬県総合スポーツセンター）
- 谷川岳山開き（7/6 みなかみ町・インフォメーションセンター）
- あかぎ林間学校プレ登山（7/6 赤城・長七郎山）
- 東北・北海道地区集会（7/12・13 北海道・洞爺湖温泉周辺）
- 高頭祭（7/25 新潟県・弥彦山）
- 上高地集中合宿（7/26 北アルプス・上高地山研）
- たにがわトレイルサミット（8/9 谷川岳・天神平）
- 平標山登山道整備（8/10 みなかみ町・平標山）
- あかぎ林間学校（8/17・18 赤城山・国立赤城青少年交流の家他）
- 群馬支部役員会（8/20 Zoom）
- 群馬支部安全研修委員会（8/21 Zoom）
- 沼田山岳会70周年記念講演会・祝賀会（8/30 沼田市）
- 沢登り実地講習（9/6 赤城山・荒砥川）
- 玉川学園大ワンゲルOB会武尊小舎視察（9/6・7 片品村・花咲）
- 群馬支部例会（9/11 前橋市・元気21）
- 日本山岳会支部連絡会議（9/17 Zoom）
- 群馬支部山行委員会（9/18 Zoom）
- 支部山行・両神山（9/20 奥秩父・両神山）
- 群馬支部自然保護委員会（9/24 Zoom）
- 日本山岳会支部事業委員会（9/29 Zoom）
- 日本山岳会山岳祭プロジェクト会議（9/30 Zoom）
- 尾瀬合宿（福島・東京支部と合同開催）（10/4・5 尾瀬沼畔・長蔵小屋）
- 谷川岳慰靈祭・閉山式（10/5 みなかみ町・土合靈園地）
- 日本山岳会古道プロジェクト会議（10/6 Zoom）

■群馬支部自然観察会（10/12 赤城山・長七郎山周辺）**■山フェスタ実行委員会（10/14 Zoom）****■支部役員会（10/15 Zoom）****■前橋市市民講師交流会（10/17 前橋市・元気21）****■ぐんま山フェスタ2025（10/18・19 高崎市・ビエント高崎）****■山の日フォーラム2025ぐんま（10/19 高崎市・ビエント高崎）****■支部山行・那須（10/19・20 那須山系）****■群馬支部安全研修委員会（10/23 Zoom）****■木暮祭（10/26 山梨・金山平）****■日本山岳会全国支部懇（10/26・27 大阪府・新大阪および箕面市周辺）****■日本山岳会山岳祭プロジェクト会議（10/28 Zoom）****■日本山岳会支部事業委員会（10/30 Zoom）****【今後の主な予定】……………****■木暮理太郎翁を偲ぶ会（11/3 太田市・生誕之地碑前ほか）****■ボランティア登山集会（11/15・16 愛知県・名古屋市および猿投山）****■群馬支部ユース顔合わせハイキング合宿（11/29・30 みなかみ町・谷川岳山麓）****■日本山岳会120周年記念式典・年次晚餐会（12/6 東京都・京王プラザホテル）****〈2026年〉****■群馬支部新年例会（1/21 高崎市・メトロポリタン）****■関東西支部懇談会（1/24・25 茨城県・大子町）****日本山岳会群馬支部報 第26号 2025年11月1日**

発行：公益社団法人 日本山岳会群馬支部

〒371-0051 前橋市上細井町1200-7(根井方)

<https://shibu.jac1.or.jp/gunma/>

編集者：広報委員会支部報担当

発行者：根井 康雄 印刷：上武印刷株式会社